

JFA PREMIERE CUP 2016(全国大会) TSG大会視察報告

■活動概略 期 日：2015年5月3日(火)・4日(水)：1泊2日

会 場：J-GREEN堺(大阪府堺市)

参加者：西野 哲之(ユース部会総務・県協会事務局長・県3種委員長)

■最初に 3種年代のTSG活動として今年もJFAプレミアカップを視察させていただいた。5月3日は予選ラウンド1・2回戦で北信越代表のアルビレックス新潟を中心に、4日は午後に行われた準決勝の2試合を観戦した。
今回の目的は今年度のU15年代の全国レベルの把握、北信越からの参加チームの戦いぶりを確認し、県内の状況をかえりみて違いを把握することである。ビデオ撮影は行わず、主に各チームの戦い方を中心に記録した。

■大会概要 本大会は3種年代の全国大会としては唯一1日2試合を課している大会であり、60分(30分ハーフ)の試合で、初日-予選ラウンド1回戦・2回戦、2日目-予選ラウンド3回戦を行い、午後から準決勝、3日目に決勝というハードスケジュール(3日間で5試合)で実施されている。

参加チームは全国9地域から各1チームに加え、前年度優勝地区1、普及枠地域2の全12チームである。

北信越代表は県予選はなく、前年度北信越リーグ1・2位と高円宮杯北信越大会1・2位チームが3月に新チームでトーナメントを行い代表を決定している。

■アルビレックス新潟Jr.ユース (北信越代表)

予選1 新潟 0(0-1・0-1)2 鹿島アントラーズ

予選2 新潟 0(0-0・0-2)2 京都サンガ

予選3 新潟 1(0-1・1-1)2 北海道コンサドーレ札幌 (3戦全敗・グループ4位)

アルビの戦いぶりは3月の北信越予選の際に感じた印象(チームとして組織的に戦うよりは個の力で強引に…)から比べるとチーム戦術が浸透し健闘していたイメージである。石川のめざす「ハイプレッシャーな守備からの攻撃」を実践してくれているかのような内容で、特にサンガの試合などは徹底してプレッシャーをかけ続けゲームを支配していた。

しかし、後述するブロックを固めた相手に効果的な攻撃が出来ず、結局、カウンターや身体能力でやられる展開が目立った。石川県出身選手であるFWも1・2戦で先発出場していたが、決定機に絡むことは出来ていなかった。しかし、このレベルでのゲームに出場して頑張ってくれているだけでも本県育成としてはありがたいことである。

■所感 ①トップレベルチームのスタイルの変容…例えて言うならブラジルW杯のスペイン→オランダ

鹿島は3トップ+時々攻撃的MF1枚程度しか攻め上がらない。常に6~7枚がブロックを作って守り、ロングボールで強力なフィジカルと個の能力を持つFWに当ててゴールにシンプルに向かうスタイル。

鹿島と準決勝で対戦した名古屋も5枚は確実に残っていたが、後半リードされると4枚のみ残して6枚が攻め上がる形へ…徐々にパワープレー化するが、鹿島DFを崩しきれず。

丁寧なビルドアップしていくスタイルが以前より減ったような感がある。いかに効率良く守り、効率良く点を取るかを重視し、勝ちに徹する戦い方をしているようなイメージである。

②U12から積み上げてきているJクラブのチームが上位へ…勝ち方を徹底

準決勝の鹿島vs名古屋は3年前の全日本少年決勝と同じカードである。4強の内、「鹿島」「名古屋」「札幌」や2勝しながら得失点で惜しくも4強進出を逃した「鳥栖」などは登録選手の多数をU12の下部組織から育ててきている。下部組織のないチームは仕方ないが、新潟などU12の下部組織を持ちながら上がってくる選手の非常に少ないチームはサッカーの質はともかくとして、勝ち上がれなかったような印象である。少年からの積み上げが、こと勝敗に関しては影響しているような気がした。(魅力的なサッカーをしているかどうかは別である)

③優勝した清水エスパルスに多様な適応力を感じる。

決勝は延長の末、清水が鹿島を振り切り優勝を果たしたが、清水は最も柔軟性のあるスタイルであったと思われる。ロングボール中心かと思えば、しっかりビルドアップをする試合もあり、前線で強烈なプレッシャーをかけるわけではなく、MF-DFの間まで運ばれるとFWもプレスバックしてきてハイプレッシャーをかける。攻めも単にサイドからクロスを放り込むのではなく、巧みにドリブルも使いながら、FWの飛び出しとスルーパスを合わすことが優先順位の1であるような感であった。

④ハイプレッシャーの課題…80分間続けられるのか?

サンガ戦でいい展開をしていた新潟も後半、足のついた選手が出ると最後に崩れてしまった。ハイプレッシャーの大切さは認識しつつも、それを1試合続けることの厳しさも考えさせられた。